

2 パキスタン

シャルワール・カミーズ

山中一郎

いずれの国にも、民族衣装と呼ばれる伝統的な衣服がある。その多くは、その国の気候風土と密接な関係がある。年間を通じて高温・低湿のパキスタンでは、白い木綿地で作られた簡単な着衣が、男女を問わず日常着の基本的な型である。

シンプル・

ライフの男たち

男性は、カミーズもしくはクルターと呼ぶシャツに、シャルワールと呼ぶズボンをはいている。日本で言えば、パジャマ姿に近い上下スタイルである。上に着るシャツの丈は膝下までと長く、両サイドにスリットが入っている。カミーズもクルターも長袖であるが、クルターは襟無しで、やや薄手の繊細な生地で作られている。一般の人々が着ているシャツはカミーズであり、厚手の丈夫な木綿地でできている。白、ベージュ、カーキ色のものがあるが、労働者たちは汚れの目立たないグレイの生地を使っている。この大型のシャツであるカミーズには、胸元にポケットが一つないし二つついている。一

般のパキスタン人は、小物類をほとんど持っていない。身につけている物と言えば、ボールペンと紙切れ、あとはタバコとマッチぐらいである。それに、長い紐のついた財布がわりの小さな布袋を、カミーズの下の腰につけている。

一方、下にはくシャルワールは、胴回りが本来のウエストの数倍もある大きなパジャマ風ズボンで、腰紐で縛るようになっていいる。カミーズと共布で作られ、単純な直線裁ちである。総じてゆつたりとしており、立居振舞とくにあぐらをかいたり、横臥するのに適している。ついでに言えば、シャルワール姿では下着ははかない。と言うより、もともと、下着をつける必要のないほどに、一枚の布地が重なって多くのひだを作り、腰から下をくるむ形となっている。要するに、だぶだぶしているのである。このカミーズとシャルワールの上下組合せスタイルが、パキスタン人の、文字どおりの日常着である。寒い季節には、カミーズの上にチョッキを着たり、セーターをかぶる。あるいは、古着の背広の上着を着る。履物は、素足に革製のサンダルというのが普通である。シンプル・ライフとは、まさにこのようなスタイルをいうのではないかと思われる。

つつましい

女性のお洒落

女性の日常着も、基本的には同じである。ただ女性の場合には、カミーズとシャルワールの組み合わせに、ドウパッターと呼ぶ長めのスカーフを首から肩にかける。もともとは、顔を覆うためのものであるが、いまは一種のお洒落用に使われている。傍目にも落ちやすいドウパッターを、女性たちはうまく扱っている。ペーナズイール・ブットー前首相が、議会で熱弁をふるいながらも、ずり落ちるドウパッターを

そのつど頭にかけて直していた仕草が印象的であった。ふんわりとした繊細なドウパッターは、なにより平安時代の姫君が、外出時にかぶった絹被衣（きぬかづき）を連想させるものがある。

女性の日常着は、基本型としては男性と同じシャルワール・カミーズではあるが、その素材や意匠においてそれなりのファッションがあり、また上層階級と庶民とは使われる生地の高級感にかなりの差異がある。インド人女性が常用するサリーは、パキスタン女性も着用するが、概ね上層の既婚者のお洒落着であり、かなり上等の生地を使った美的なものが多い。また、都会の若い女性では、ヒールのある靴を履く人も多い。

パキスタンの女性の服装

で無視できないのは、パルダの慣習である。パルダはベールやカーテンの意であるが、女性隔離と訳されている。女性は、外出時にはチャイダルと呼ぶ一枚の布か、ブルカと呼ぶ頭部からくるぶしまで、身体全体を覆う衣服を着ける。他人の



シャルワール・カミーズとドウパッター

男性に、顔を見せないためである。もともと、都会と農村、また当の女性の年代によっても着用の頻度に差異はある。コーランには、女性にこうした服装を強制する章句はない。ただ、男性の眼を必要以上に刺激しないよう、肌を露にしないようにとの諭しはある。

バザール随一の衣料店

衣類を扱う店は、どここのバザールでも最大の売り場面積を占めている。数十の店が軒を連ねており、壮観である。そのたたずまいは昔の日本の呉服屋のようであり、やや高床となった店内の壁面の棚には、びっしりと布地が積み上げられている。既製服も、ずらりと下がっている。そのどれもが、金糸銀糸で織った、文字どおりきらびやかな布地である。母娘とおぼしき客が、店員と相談しながら品定めをしている。ダルズイー（仕立屋）は、店とは別のところがあり、急がせればその日のうちに出来上がる。洋服とは異なり、複雑な縫製過程や技術を必要としないからであろう。

洋服姿は都市型エリート層

パキスタンの伝統的な日常着がシャルワール・カミーズであるというのは、以上に述べたとおりであるが、都市では洋服姿もかなり多い。もともと、それは男性の場合に限られている。男性、特にビジネス分野の比較的高い地位の役職員、医師・弁護士・エンジニアなどの専門知識人、銀行や大手企業の職員といったホワイト・カラーの人たちは、背広を着ている。正確に言えば、こうした都市型のエリート層には背広姿の人がいるが、非エリート層で背広姿の人はほとんどいないということである。したがって、背広姿であることは、自分がエリートであることを誇示する一つの手段にもなる。

*

一九八〇年代のズィヤー政権期に推進されたイスラーム化政策の一環として、民族服の着用が奨励され、特に公務員の場合、着用が強制された。それ以前の時代に比べ現在は、どの階層や職業でも、シャルワール・カミーズ姿が多くなったという印象である。しかし、もともと背広にネクタイ姿はパキスタンの気候風土に合っているとは思われない。第一、一日五回のお祈りをするのに、背広姿で跪いて祈ったとしたら、随分と窮屈なことになるであらう。

(やまなか いちろう／アジア経済研究所地域研究部研究主幹)